

私の少女時代と福岡大空襲

糸島郡志摩町

溝口 ヒサエ

昭和3年生まれの子、兄2人と姉4人の7人兄弟の末っ子に生まれました。家は農家で今80才の兄は兵役を終え、満州（現在、中国東北地方）から帰り、また召集でビルマ戦線へ行き、下の兄も満州から南方戦線へ行く途中に、台北沖で潜水艦の攻撃をうけて台北で終戦を迎え、82才の姉は看護婦として九大から台北大学へ行きましたが、皆元気で帰ることができました。別の姉達も結婚し、それぞれに苦しい時代をのりこえて参りました。

今は仕事も機械化されて、田畑も牛馬で鋤くこともなく、骨折らずにできるようになりました。私達の仕事もスイッチ一つおせば何でも間に合うようになり、昔とくらべれば随分楽になりましたが、母達の時代は、父と一緒に田畑の仕事をし、そして炊事洗濯と子供の世話と何かから何まで自分でしなくてはならないものでした。それで子供達にもできる仕事がきめられていて、6年生の姉が丸麦をゆでておくことと、二人で風呂に水を汲み込み沸かすことでした。ある時二人共遊びに熱中していて風呂を沸かすのを忘れていて、父から、「手伝いしないものは出て行け」と大目玉を貰い、隣の石に腰かけて母の迎えを待っていたことをなつかしく思っております。自分がその年になり、子供が少しでも手伝ってくれていたら大変助かり、子供の頃叱られたのは当然のことだと思ひ当りました。父母は7人の子育てに大変で、蚕を育てて繭を売り、母は残った繭から糸をつむいで、姉達の着物を雨降りや農閑期にガラガラ、トントンと音もかろやかに織っていました。白生地が織り上り、染物屋さんで柄をきめ、出来上って来るのを楽しみに織っていたようです。

昭和16年に糸島高等女学校に入学、そして20年に卒業しました。学校の月謝は5円で、その中、50銭は旅行貯金でしたが、戦争が激しくなり、旅行は行かずに卒業しました。1年生の間に要した費用はたしか185円ぐらいだったと覚えております。入学当初は英語もなっていました、戦争のため途中で中止になりました。農家も兵隊に行かれて人手不足なので学校が休みになり、2、3人で、からしもみの手伝や、田植の時は、お寺で託児所が開かれていたので、子供の世話をしに行きました。裁縫の材料の反物を買うのも衣料切符を持って行って買わねばならず、時には洗い張りしたもので稽古をしました。とにかく不自由な時代でした。4年生の時は、学徒動員で三菱電気今宿工場へ飛行機の部品作りにと通いました。母の手織の着物をほどいて作ったモンペをはき、頭には鉢巻きをしめ、防空頭巾や救急袋、モンペにも住所、氏名、血液型をかいたものを縫いつけて、野北から前原駅迄40分ぐらいかけて自転車で行き、それから筑肥線の貨車に飛び乗って、毎日ためらうことなく行きました。空襲のサイレンが鳴るたび、長垂の松林へと走って避難していました。

20年に卒業し、福岡無線電信株式会社野北中継所に就職し、5月に福岡市蔵本町に講習所が開かれ、半年の予定で入所して勉強にはげんでいました。

忘れようとしても忘れられないのが、6月19日の福岡大空襲です。臉をとじれば今でもはっきりと当時の様子が目に浮かんで来ます。その日、先生から「昨日は悪い夢を見たので今日何かよくない事があるかもしれないと思うので、すぐ逃げられるように用意して席につくように」との注意があり、防空頭巾や救急袋等、用意して床につきました。ねむりに入ろうとした時、警戒警報のサイレンが鳴り、その時はもう頭上にB29の姿が見えていました。板塀の隣は奈良屋小学校の運動場でしたので、くぐり戸をあけ、一目散に先生達と校舎へと走って行き、廊下へ目と耳に手をあてて、うつぶせになりました。と同時に、ザー、ザー、シュー、シュー、バラバラと音がして明るくなりました。そっと目をあけて見ますと、運動場中火の海となり、空は煙くさく、赤くなっていて、この世の物とは思えない光景となっていました。小学校の体育館がチョロ、チョロと燃え出していたので、10人ぐらいで井戸から水を汲み、バケツリレーで消しました。先生が「ここには危ないので、比恵の中継所へ行きましょう」といわれたので、防空頭巾に丹前をぬらしてかぶり、川の横を走って、走って、中継所まで避難しました。途中ふり返って見ますと、何か爆発したのか、キノコ雲みたいに赤い炎がふき上がっていました。中継所にたどりつき一息つきました。それから家へ帰る迄の記憶はあまり覚えていません。4、5日いて、幌つきトラックで送ってもらい、やっと家へかえり人心地がついたことを憶えております。

今考えると、飛んで来る灰を見た家の者はどんなに心配したことかとおつくづく思っております。母は子供達の無事を祈って海からお汐井をとり、毎日毎日詣っていました。何時死ぬともわからぬ戦争のことを思い、神にお願いするより心のよりどころがなかったんだなあと思えました。お陰で一番空襲の被害の多かった所にて助かったのも、母の祈りのお蔭と感謝しております。

西日本新聞で戦後40年の手記募集があり、応募した私の手記を見られ、一緒に体育館の火を消した奈良屋の方より電話があり、わざわざ尋ねて来られ、秋に皆で逢うことを約束して、皆で尋ねて行き、奈良屋小学校や住んでいた所を見て回りました。今は50m道路となっている跡地に立ち、平和の有難さをしみじみとなつかしく話し、楽しい一時をすごしました。

あれから50年、戦争や空襲の体験をした人も少くなり、毎年6月19日が来るたびに今の生活に感謝しています。戦時中の物不足、そして戦後の食糧難、家は農家だったので食べ物はいまあまあ不自由はしませんでした。都会の人は大変な生活だったと思います。今は何でも手に入らぬ物はなく、使い捨てる物、ゴミの山を見てこれでいいんだろうか、いつかシッペ返しに来るのではないかと思う時があります。

今年は阪神大震災や、サリン事件、オウム等いろいろ不安な事が一杯です。戦時中のように皆、人のことを考えて暮していれば人為的な事はおこらないのでは、と思っております。私達の時代の教育は国のためということで自分の主張はあまりなく、今は勉強さえ出来ればいいと言う親子が多くなり、大切な思いやりの心がなくなって、悲しいことだと思っております。

これから先戦争等のおこらない、おこしてはならない事を念じ乍ら筆をおかせて戴きます。